

科研費の基金化の効果等に関する検証（概要）

科研費は、平成 23 年度に一部種目（基盤研究（C）、挑戦的萌芽研究、若手研究（B））を基金化し、複数年度にわたって研究費を柔軟に使用できるようになりました。

この科研費の基金化の効果等について把握し、検証するため、平成 23 年度に基金化された種目の交付を受けた研究者及び当該研究者が所属する研究機関を対象にアンケート調査を実施しました。

【調査の概要】

1. 調査対象

(1) 研究機関

平成 23 年度基金対象種目の交付件数及び研究機関種のバランスを考慮して、計 30 機関を対象とし、全機関から回答を得た。

(2) 研究者

平成 23 年度基金対象種目の交付を受けた研究代表者について、計 700 名を対象とし、485 名から回答を得た（回答率 69.3%）。

2. 調査項目

(1) 研究機関・研究者共通項目

- ①基金化のメリットについて
- ②基金化によって研究費の適正な管理に関して支障を感じるか
- ③基金化によって管理がルーズになり不正が多くなるのではないかとの意見について
- ④今後その他の種目を基金化することについて
- ⑤今後の科研費制度への期待や要望等について

(2) 研究機関のみの項目

- ①年度末や年度をまたいでの物品購入等の状況
- ②基金化による研究機関としての事務負担や事務コストの状況

(3) 研究者のみの項目

- ①基金化された研究費とそれ以外の研究費の研究成果創出上の効果・メリットの比較
- ②基金化された研究費とそれ以外の研究費の効率的執行についての比較

3. 調査時期

平成 24 年 4 月 12 日（木）～5 月 11 日（金）

【調査結果の概要】

(1) 研究機関・研究者共通項目

① 特にどのような点について基金化のメリットを感じるか。

(回答のまとめ)

「研究費を自由に次年度に回せるようになったこと」及び「いわゆる『年度末の使い切り』をする必要がなくなったこと」が、研究機関では90%、研究者では80%を超えている。

また、基金化によって初めて可能となった「研究費の前倒し」については、研究機関では46.7%、研究者では36.5%と比較的低くなっている。

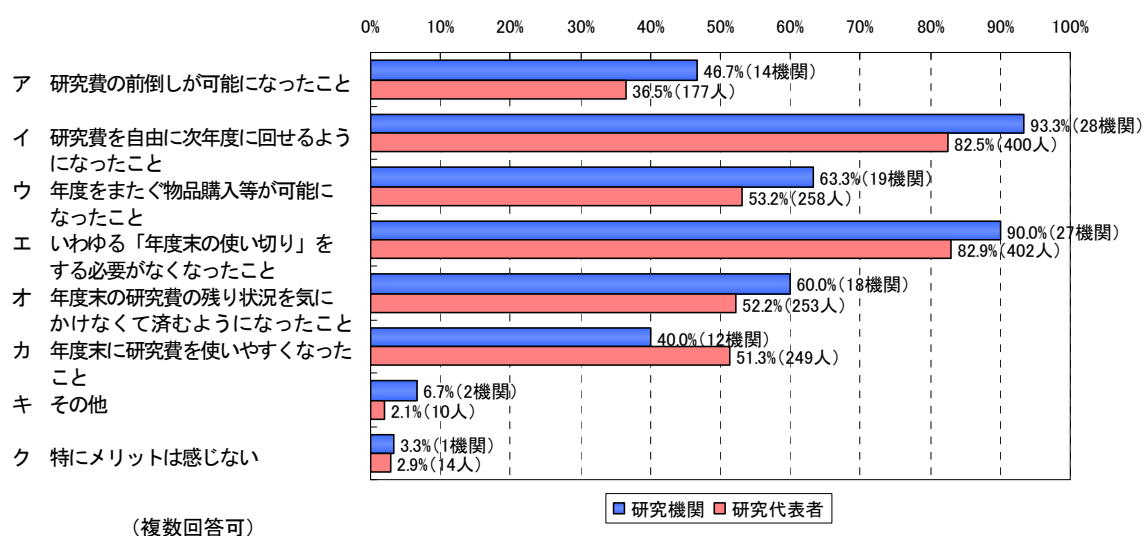
なお、「特にメリットは感じない」との回答もあるが、計画どおりに使用したためなど、年度末から年度当初にまたがるような研究費の使用を行わなかったことによる理由がほとんどであった。

研究機関の事務の現場からは、一部基金化も含め、基金と補助金が混在していることによる事務負担の増を指摘する意見もあった。

(解説)

研究機関、研究者とも、年度区分を気にせずに研究費を自由に使用できる様々な基金化のメリットを大いに感じていると考えられる。

基金化によって初めて可能となった研究費の前倒しについては、それほど基金化のメリットとしては感じられていないが、この結果は平成23年度が基金制度導入初年度であり、制度の内容が十分に研究機関、研究者に浸透していなかったことなどが影響しているのではないかと考えられる。また、少数ながら基金化のメリットについての理解が不足している研究現場があるようである。



○自由記述（主な意見）

キ その他（具体的な内容を以下にご記入ください）

【研究機関】

- ・研究計画の変更に応じて、研究費を次年度に回し、翌年分と合算して必要な設備等を購入することが可能となり、研究者にとってメリットがある。
- ・研究者自身にとっては、研究遂行上、選択肢ア～カ全てがメリットであると思われる。研究協力事務担当者にとっては、補助金と違い、年度末の予算残額管理がなくなり、繰り越し手続きが不要となった点、採択年度以外の年度の交付申請手続きが不要になった点、継続課題の入金が高い点についてはメリットとして感じられる。
- ・一部基金化種目については、補助金部分と基金部分が混在している状況であるので、通常の基金分以上の事務手続きを研究者を含め研究協力事務担当者へ課すのではないかとと思われる。
- ・現在同じ種目で補助金課題と基金化課題が混在している状況であり、それに伴う、手続きの違いにより、事務負担が増加している面もある。

【研究者】

- ・研究を始めた後に大きな発見やアイデアが生じた時にそのアイデアを柔軟に追求できるようになったことが非常に大きい。
- ・研究は、当初予想した通りには進行しない。ついては予算の執行も実験状況によって、変動するものである。基金化して運用できる今の状況は自然である。
- ・選択肢にあるような様々なメリットにより、研究に割くことのできる時間が増えたのが一番のメリットである。

ク 特にメリットは感じない（その理由を以下にご記入ください）

【研究者】

- ・基金として使用した研究費がたまたま少額であり、計画どおり実施したため。
- ・一年だけなのでわからない。
- ・大学から基金化が意味するところを伝えてもらっておらず、いまでも年度末の使い切りが前提になっていると思っていた。

② 基金化により、研究費の適正な管理に関して支障を感じることはあったか。

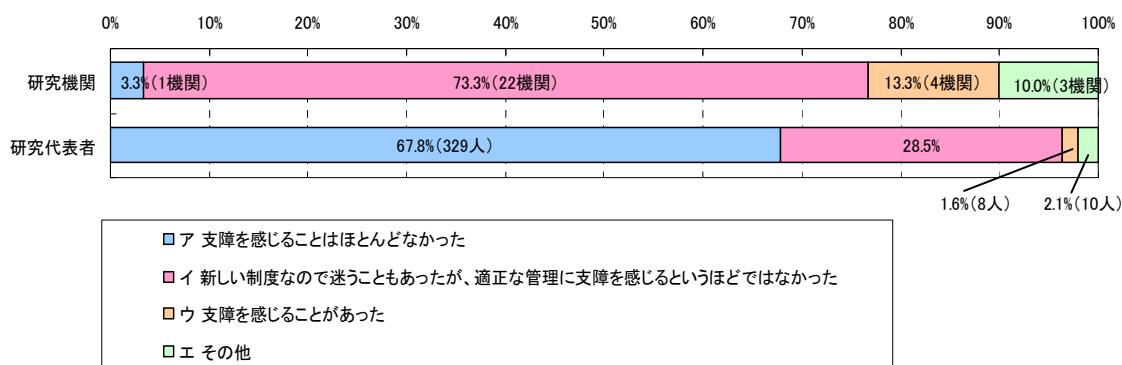
(回答のまとめ)

「支障を感じることはほとんどなかった」及び「新しい制度なので迷うこともあったが、適正な管理に支障を感じるというほどではなかった」を合わせると、研究機関は 76.6%、研究者は 96.3%と、研究者の方が研究機関よりも約 20 ポイント高く、研究者はほとんど支障を感じていなかったと考えられる。

一方、「支障を感じることはあった」と回答した研究機関が 13.3%あり、その具体的な内容としては、補助金と異なる取扱いが必要となることを理由とするものが多かった。また、研究機関の経理手続きが基金化に対応していないことにより、基金のメリットが十分に発揮されない例もあった。

(解説)

平成 23 年度は、基金制度の内容が研究者、研究機関に十分浸透していなかったことなどにより、研究費の適正な管理に関して多少支障を感じることはあったと考えられるが、今後は、徐々に改善されるものと考えられる。一方、基金と補助金が混在している現状からすれば、事務面の複雑化は否めないと考えられる。



○自由記述 (主な意見)

ウ 支障を感じることはあった (具体的な内容を以下にご記入ください)

【研究機関】

- ・基金種目については、前倒し請求を行えるため、交付申請書と異なる請求をした課題の管理、それに伴う費目の管理が補助金と違い、支障を感じた。
- ・制度設計の事前説明からの時間があまりなく、システム上 (収支簿等) 十分な対応ができたとは言えず、また補助金+基金の対応についても苦慮しており、適正な管理に支障がないとは言い難い。

【研究者】

- ・経理部門が手続きを理解しておらず3月29日納品のものの伝票処理が4月に入った際に、3月で経理処理を締めてしまったので、前年度の科研費では支払いができなるとされ、大学の経常費から支出することになってしまった。
- ・導入初年度であったこともあり、残念ながら、大学の事務側の対応が十分とはいえず、結果として年度をまたぐ予算の執行に関しては従来と変わっていると実感でき

る機会が少なかった。ただし、これに関しては、制度が浸透するとともに改善されていくものと期待される。

エ その他（具体的な内容を以下にご記入ください）

【研究機関】

- ・所謂“駆け込み”的な執行は抑制できることから、適正な管理に関しては支障を感じることはないが、補助金分と基金分とを並行して事務処理する必要があり、やや複雑化したのではないかと受けとめている。

【研究者】

- ・既存の補助金と事務処理が交錯し、煩雑である。
- ・私の所属機関では年度末における物品購入の締切りにより、基金化された後でも年度をまたぐ物品購入はできなかった。可能であれば、「年度をまたぐ物品購入を可能とする」旨を配分先機関に指導していただきたい。
- ・他大学では、自由に年度をまたいでよいと大学事務局から連絡があったそうだが、本学では、できるだけ次年度に回さないようにとの指示があり、金額も少額に限るとのことであった。大学、研究機関に対して、規定の統一を行っていただきたい。
- ・このアンケートをみるまで年度の区切りがなくなった事実を知らなかった。

③ 基金化により管理がルーズになり、不正が多くなると思うか。

(回答のまとめ)

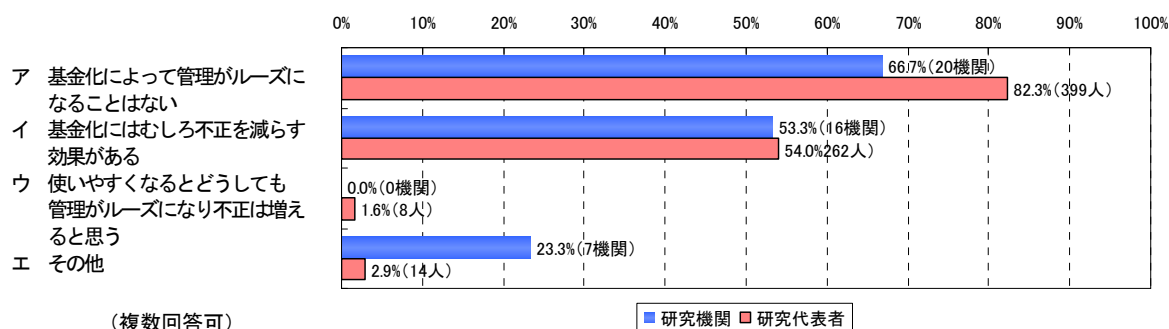
「基金化によって管理がルーズになることはない」が研究機関では 66.7%、研究者では 82.3%と、いずれも最も多かった。

また、「基金化にはむしろ不正を減らす効果がある」が研究機関では 53.3%、研究者では 54.0%と、いずれも半数を超えている。

「その他」の具体的な内容として、研究機関には、科研費の使用方法が、補助金と基金で異なることで経理管理上の誤りが発生することを懸念する意見などがあつた。また、研究者には、不正と研究費の使用方法の変更（基金化）には関係がないなどの意見が多かつた。

(解説)

ほとんどの研究機関、研究者は、基金化によって管理がルーズになったり、不正が多くなるとは考えていないと言える。



○自由記述 (主な意見)

エ その他 (具体的な内容を以下にご記入ください)

【研究機関】

- ・基金化と管理がルーズになることは別問題だと考えるが、現在の補助金と基金が混在している状態は管理の複雑化をまねいており、事務的な不手際が生じる可能性はある。
- ・年度の区切りが不正使用の要因になっていたのは事実と思うが、実際には不正使用は研究者本人の資質の問題である。
- ・一部基金化した種目については、制度の複雑化により、学内周知を行っているとはいえ、研究者によっては、執行管理上誤解を招く恐れがあり、不適切な経理を生じる原因になる可能性がある。
- ・補助金・基金・一部基金と事務的な執行管理的には3種類となり煩雑になっているため、不正使用ではなく不適正な使用(事務的ミスによる誤った収支報告等)が増えることが懸念される。

【研究者】

- ・発注が年度末に集中することが避けられ、経理担当でのチェックが年間を通じて平準化するため、むしろ不正は減ると思う。
- ・ごくごく一部の不正のための制度設計だと、ほとんどの善良な研究者の研究効率を下げることに繋がる（事務効率の煩雑化により）。研究の活性化を重視してほしい。今回の基金化はすばらしい英断だと思う。
- ・不正防止のために研究機関の事務職員による規制が強まり、研究に必要な出張・物品購入に支障が出る恐れがあるので、そのようなことがないようにしてほしい。
- ・不正は、研究者個人の倫理観に基づくもので、関係ないと思う。

④ 科研費の基金化には予算増が必要だが、その他の種目を基金化すべきと思うか。

(回答のまとめ)

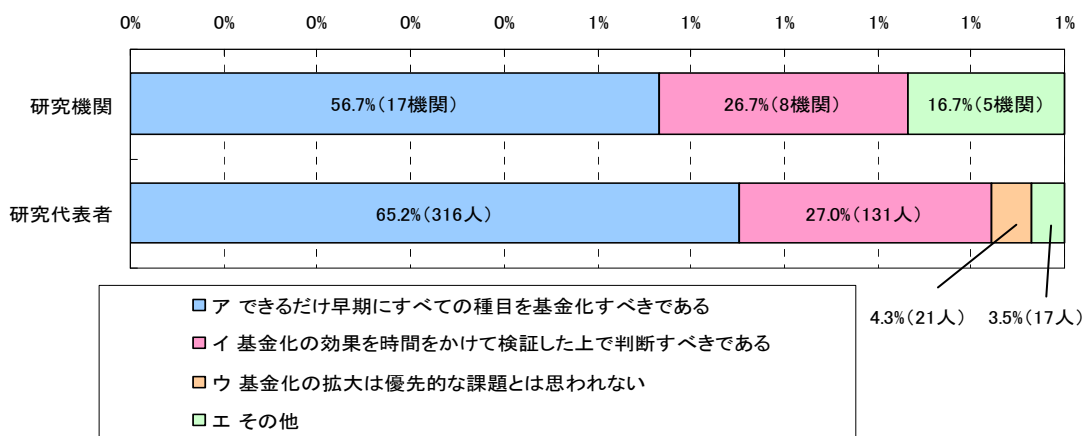
「できるだけ早期にすべての種目を基金化すべきである」が、研究機関では56.7%、研究者では65.2%と、いずれも最も多かった。

次いで、「基金化の効果を時間をかけて検証した上で判断すべきである」が、研究機関では26.7%、研究者では27.0%となっている。この中には、一部基金化による制度の複雑化や、基金化に伴う国の財政への影響、採択率の低下に対して懸念する意見も見られた。

また、「その他」の具体的な内容として、研究機関には、全額基金化している種目と一部基金化している種目で管理が異なることへの意見などがあつた。また、研究者には、様々な意見があつたが、今後その他の種目を基金化することへの反対意見はなかつた。

(解説)

「その他」の具体的な内容として、研究機関からは、補助金と基金で使用方法などが異なることで事務手続きが煩雑化していることの改善を望む意見、研究者からは、採択率の向上や研究費規模の拡大を望む意見など、その他の種目を基金化することよりも、他の改善を望む意見もあつたが、今後その他の種目を基金化することへの反対意見はなかつた。研究現場における負担軽減を図るためには、今後、できるだけ早期にすべての科研費を基金化する仕組みを検討することが必要であると考えられる。



○自由記述 (主な意見)

エ その他 (具体的な内容を以下にご記入ください)

【研究機関】

- ・基金化を進めることに異論は無いが、H24 年度新規分で導入された一部基金化の制度は避けるべき。無理に2種目に基金を導入しなくても、可能な範囲で1種目ずつでも完全に基金としたほうが良かったと思う。
- ・今年度より一部基金化された、基盤研究 (B) と若手研究 (A) についてであるが、500 万円分は基金として、それ以外の研究経費については、補助金として、措置さ

れており、これにより、事務処理が非常に煩雑になると考えられる。1つの課題に対し2つの資金の管理が必要となり、予算管理等について、他の種目よりも事務的な手間がかかる。また、今後の事務手続きとしては、補助金の側面、基金としての側面での事務書類の作成を行う必要があるため、従来の補助金種目、基金化種目よりも複雑であり、膨大な作成時間を各研究者に課すことになるのではないかと。

- ・ 基盤研究（B）、若手研究（A）のような一部基金化の拡大ではなく、時間をかけても全額基金化の種目を拡大してほしい。

【研究者】

- ・ 基金化によって助成額以上の予算が必要になり、結果として科研費の採択率が下がるのであれば、基金化は不要と考える。
- ・ 当該年度の助成額以上の予算を一時的に措置することが、現在の国（文科省）の財政状況に負荷をかけないかの検討が必要。
- ・ 助成金と基金化が並行して存在すると、書類の様式や締め切りなども異なり、事務手続きも煩雑化しているため検証が必要。
- ・ できるだけ早期にすべての種目を基金化すべきであると基本的に考える。特に研究費が高額のモノほど、基金化することによって、年度末に無駄な買い物をすることも減り、効率的な研究費の使用が可能になると期待できる。
- ・ 基金化したことを理由に科研費全体の予算額の縮小にならないようにしてほしい。

⑤ 科研費制度への要望、基金化のメリットを更に活かすために必要なことは何か。

【研究機関】

(基金化に関する意見)

- ・現状の補助金・基金の二重構造が解消されて早期に基金に一本化されることが望まれる。
- ・平成24年度から補助金、基金、補助金と基金の混合型（基盤研究（B）・若手研究（A））の種目の3種類となったことにより、書類の種類が増え煩雑になった。
- ・今年度導入された、一部基金化の2種目については、経理管理が煩雑になることや、2つの制度が混在しているため、研究者の執行管理上誤解を生じやすく、不適切経理が生じる原因となる恐れがあるため、この2種目については、早急に全額基金化を進めて頂きたい。
- ・新規基盤研究（B）の一部基金化の導入も含め、基金化への対応にとまどった。今後様々なケース（補助金、基金、補助金と基金の混合型）への対応として、FAQの充実をお願いしたい。

(その他の意見・要望等)

- ・今回のアンケートのように、各機関の担当者の意見を聞く機会を多く設けると良いと思う。可能であれば、制度について考えるワークショップなどがあると良いのではないか。
- ・制度の改正等については、あらかじめ事前の説明やシステム対応のための準備期間が欲しい。
- ・科研費の全種目を日本学術振興会に移していただきたい。現在は、新学術領域研究が文科省でそれ以外の種目は日本学術振興会となっており、書類の提出先や提出時期が異なりミスの原因につながりやすいため。
- ・電子化を進めるのであれば紙を無くして頂きたい。紙もデータもとなると結局提出物が倍になり、それに伴い事務作業・教員の手間が増えている。

【研究者】

(基金化に関する意見)

- ・基金化により、年度をまたぐ調達ができるようになったことは大きなメリットである。今後、他の研究費にも適用されることを強く希望する。
- ・科研費によって、基金と補助金で扱いが異なるのは、過渡期として仕方ないが、すべての科研費を基金化して欲しい。
- ・予算の基金化はこれまでの科研費の持っていた多くの不満を解消する画期的な制度だと思う。これによって研究の進展の中で生まれたアイデアや発見を大きく生かすことができるようになった。
- ・科研費が基金化されることのメリットは本当に大きなものである。基金化されることで逆に不正使用が無くなっていくのではないかと考えている。他の種目についても基金化されていくことが大事だと思っている。

- ・さまざまな問題点が出てくる可能性もあると思うが、基金化の措置は研究者側にとって非常に有益であると感じている。研究費を有効活用できるというメリットは、その一方で、強い倫理観を持って研究を継続するという研究者側の資質を問う形にもなると感じている。
- ・研究計画の進展や変更に対して柔軟に対応できるため、物品購入に無駄が生じにくくなった。
- ・慎重な検証も必要だと思うが、基金化のメリットはより大規模の研究種目でこそあると思うので、できるだけ早く全ての種目の基金化を希望する。
- ・基盤B以上の大型予算での基金化のほうがメリットが大きくなると思われる。
- ・年度末の不毛な使い切りの必要がなくなったため、国民の血税の無駄遣いが減るメリットは大きいと考える。
- ・年度末の使い切りがなくなったので、無駄な予算消費がなくなったのは多くの研究者が感じているメリットかと思う。高額種目に関しては、特にその効果は大きいのではないか。
- ・初年度ということもあり、具体的にどのようなことが可能であるのか、どのような手続が必要となるのかがわかりにくかった。また、今回は研究期間2年という短期間のため、それほどメリットが得られるとも思われなかった。
このような柔軟性がより有効なのは、3～5年といった、長期間かつ大規模な研究である。ただ、より厳密なチェックも必要である。「自由に使えるようにして最後に報告」というよりは、研究期間内にはいつでも、事前申請することにより、研究計画を変更し、年度ごとの研究費の割り振りを変えられるようにするのも一案ではないか。
- ・基金化による単年度主義からの脱却は、財政当局の素晴らしい判断と思う。

(基金化に関する研究機関等への意見・要望)

- ・研究機関における理解の浸透と制度の改善には努力が必要と感じる。研究機関の事務方は、これまでの管理制度と新しい仕組みのギャップを埋めることができていない。
- ・基金化について周知が徹底されていない。何がよくなったのか、最初わからなかった。非常によいことだと思うので、より周知をお願いしたい。
- ・基金化によって科研費を使用した研究効率は高くなったと思う。使用する研究者の意識をそれにあわせるよう、教育が必要かもしれない。
- ・基金化のメリットを活かすためには、基金化の考え方や具体的な会計処理方法について、大学・研究機関の会計担当者への広報を継続的にお願いしたい。
- ・科研費制度の画期的な改善だと思うが、経理を担当する大学の事務は、それにまだ適応していない。非常に特別な場合を除いて、年度にまたがった研究費の使い方はできないと思っている。そのように説明を受けた。本当に役立つ使い方ができるようになるためには、少し時間がかかると思う。また、基金化した大金をいかに有効に使うかというモラルが研究者に、ますます問われるようになると思う。そのような意味でも時間が必要だと思う。改善しながら継続すべきだ。

- ・組織内事務担当者が年度末決算を行うために、従来通り1月から3月までの研究執行額の確定を求められ、煩わしさを同様に感じた。基金化のメリットをさらに活かすために、全研究の基金化により、手続きの足並みをそろえ、年度末決算の意識を改革する必要があると思う。

(その他の意見・要望)

- ・研究には、確かに成果を挙げられるかどうか分からないという側面がある。しかし、過去に多くの研究に国を挙げて種を撒いたことが我が国の科学技術を支えてきたことは事実である。管理、評価、先見性ということを判断する尺度は難しいが、適正にかつ有効に使えるよう、今後よい施策を期待する。
- ・若い時代になかなか研究費を取得できなかったことがある。特に研究をスタートされて間もない多数の方々へも、少額で構わないので、研究費が配分されるようなシステムを望む。
- ・基盤研究（C）や若手研究（B）の採択金額を大きくし、ゆとりを持って研究が行えるようにしていただきたい。現在、若手研究（B）を採択金額の関係から2年で申請していますが、採択金額が大きくなれば3～5年で申請したいと思う。
- ・国家の財政事情が苦しいときではあるが、中・長期的な観点から大学・研究機関への研究費を減じることがないようお願いしたい。一方で、それに対して研究者が成果を出すことは、当然の責務である。
- ・研究所の運営交付金額が減少しているため、科研費なくしては研究を続けるのが困難な状況である。基金化によりかなり科研費の使い勝手がよくなったと感じている。書類の数を減らすなどして、日本学術振興会と実際にやり取りをする事務方の負担も少し減らすことができればもっと良い制度になると思う。

(2) 研究機関のみの項目

① 年度末や年度をまたいでの物品購入等はどの程度行われているか。

(回答のまとめ)

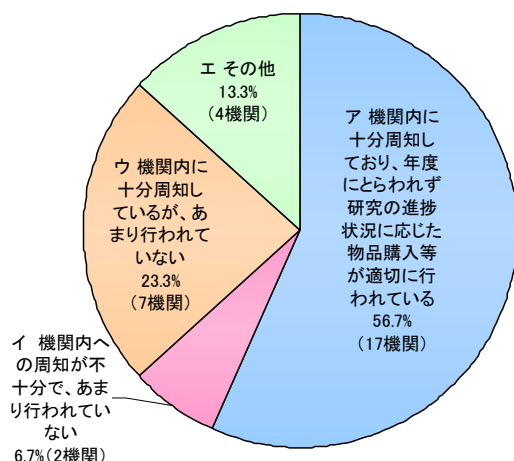
年度末や年度をまたいでの物品購入等については、機関内に十分周知し、「適切に行われている」が56.7%と最も多かった。

また、機関内への周知が不十分で「あまり行われていない」及び機関内に十分周知しているが「あまり行われていない」を合わせると30%となっている。

(解説)

約6割の研究機関において、年度末や年度をまたいでの物品購入等が「適切に行われている」が、一方で、約3割の研究機関では「あまり行われていない」ため、今後、研究機関内において、基金化による研究費の柔軟な使用が実際に行われるよう周知を図っていく必要があると考えられる。

なお、8割の研究機関が「機関内に十分周知している」と回答しているが、研究者の自由記述による回答をみると、基金化について周知されていないとする意見も少なくないことから、研究機関と研究者の意識に差があると考えられる。



○自由記述（主な意見）

ウ 年度の区切りにかかわらず物品購入等ができることを機関内に十分周知しているが、あまり行われていない（その理由を以下にご記入ください）

- ・学校会計上、年度内の購入に係る支出締切日が3月中とされているため。
- ・年度末や年度をまたいでの物品購入等はあまり行われていない。年度区分にかかわらず物品購入ができることについて、機関内に周知は行っているが、研究者側でも従来の年度内執行という概念が払拭しきれていないと思われることが要因として考えられる。
- ・研究者・事務職員とも、補助金のような単年度会計が原則である、という意識があるためであると思われる。

エ その他（具体的な内容を以下にご記入ください）

- ・今般の基金化による変更内容の概要は研究者全員に通知している。ただし、本来の学校会計年度との整理、ルール作り等に関して、財務部門と調整がついていないため、年度を跨ぐ物品購入等の積極的な案内は控えている状況である。
- ・十分周知しているが、実績については把握していない。

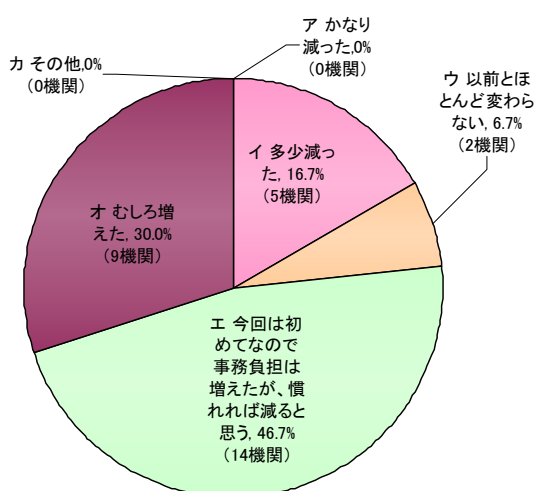
② 基金化により、研究機関の事務負担や事務コストは減ったか。

(回答のまとめ)

基金化により年度のしぼりがなくなったことによる研究機関としての事務負担や事務コストについては、「多少減った」及び「慣れれば減ると思う」を合わせると63.4%となっているが、「むしろ増えた」が30%となっている。

(解説)

事務負担や事務コストについて、「むしろ増えた」が30%あったが、補助金と基金で管理方法や作成書類が異なることなどを理由とするものがほとんどであるため、今後、科研費の管理方法や作成書類の簡略化を図るとともに、できるだけ早期にすべての科研費を基金かすることが必要であると考えられる。



○自由記述（主な意見）

ウ 以前とほとんど変わらない（その理由を以下にご記入ください）

- ・年度使い切りがなくなったことにより減った面もあるが、補助金と基金を分けて管理することや、一部基金化により負担増となっている面もある。
- ・基金化されたことで繰越承認申請を行う手続きが不要になったのは大きな進展であるが、今のところ事務負担の軽減はほとんど感じられない。

補助金と基金では、名称は異なっても提出の必要な書類の数がほとんど同じであること、科研費の入金も毎年度発生するため分担金の配分も毎年必要であること、基金の支払請求を行う時期が3月以前のため4月1日に転出することが予定されている研究者の科研費を一旦受取り、新機関に送金し直す手間が増えていること等が理由である。

- ・事務的な負荷を軽減する視点からは、電子化の更なる進展と、支払請求等でデータでの提出を行っているものを押印した書類でも提出することの廃止等を期待したい。

オ むしろ増えた（その理由を以下にご記入ください）

- ・基金化した種目は3分の1ほどであり、問い合わせが多かったこと、年度末後には実施状況報告が必要なこと、年度末の忙しい時期に支払請求書の提出があり、年度

当初に入金されるため、他の資金に先駆け二度手間な仕事が増えた。

- ・請求・入金回数が増え、部局への配分や分担金の配分等の事務手続きが増え、次年度の研究費使用や前倒し使用による研究費管理の手間が増えた。また、助成金と補助金が混在していることで手続きが煩雑化している点も多い。
- ・従来の補助金種目と基金種目では、取扱いが異なるため、従来通り一括して事務処理作業を行うことができず、処理作業が以前より増加している。また、異なる制度が混在しているため、学内で周知を行っていても、研究者が手続きを誤るケースも以前より増加している。
- ・ルールが補助金と基金の2本立てになっており、各種様式（申請・報告等）、執行管理も分かれているため確認・修正等にも時間がかかる（研究期間中の収支状況報告は軽減（簡略化）を検討してほしい）。

(3) 研究者のみの項目

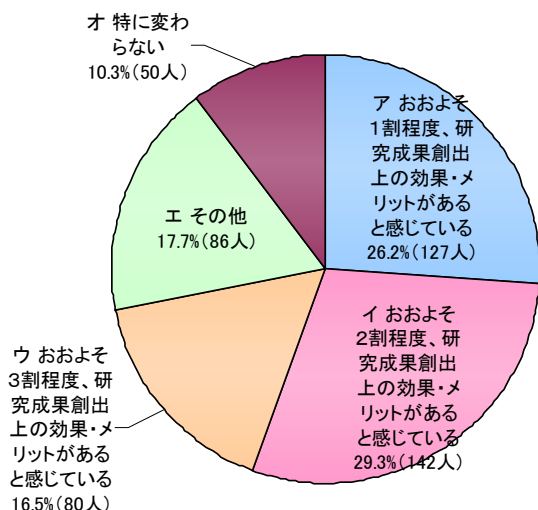
① 基金化により、研究成果創出にあたっての効果・メリットを感じるか。

(回答のまとめ)

基金化による研究成果創出にあたっての効果・メリットがおおよそどの程度あると感じているかについては、「1割程度ある」、「2割程度ある」及び「3割程度ある」を合わせると72%となっている。

(解説)

程度の差はあるが、基金化による研究成果創出にあたっての効果・メリットについては、約7割の研究者が「ある」と回答しており、昨年度実施した「最先端研究開発支援プログラムにおける基金の活用に関する調査」においても、同様の質問に回答した研究者28名中27名が研究成果創出に良い影響があったと回答していることから、研究費の基金化は額の多寡に関わらず、研究成果創出に大きな効果・メリットがあると考えられる。



○自由記述（主な意見）

ア 単年度執行の研究費による研究と比較し、おおよそ1割程度、研究成果創出上の効果・メリットがあると感じている（お感じになる理由も以下にご記入ください）

- ・通常、1月から3月は年度内の研究費使用について特に気にしながら研究をしなればならず、煩わしかったが、複数年度執行が可能になったことにより研究に専念できた。
- ・年度末や年度はじめなど、予算の関係で研究がしにくい期間が数ヶ月生じていたので、その研究できない期間を一割程度とした。
- ・大学教員の場合の年間スケジュールでは、研究は夏季休暇（8月9月）春季休暇（2月下旬から3月）に、特に集中して進めることになる。単年度執行の場合、肝心な3月は、予算執行のための事務方の締めが早目に設定されるため、学生アルバイトによる研究の補助業務も、3月中旬までに終らせなければならなかった。また、新

年度に入ってから4月からの研究業務も途切れることなく継続できるので、作業的な活動効率が1割程度は向上したと思われる。

- ・3月にも予算執行が可能になるので、残りの月の割合を考えると1割程度の効果があると考えられる。
- ・これまでは年度がわりで研究活動が一時的に鈍化する状態であったが、基金化により、年度末と年度初めのパフォーマンスが向上したと感じる。年度にかかわらず実験計画をたてて実施することができており、年度末に開催される海外開催の学会にも参加しやすくなっている。

イ 単年度執行の研究費による研究と比較し、おおよそ2割程度、研究成果創出上の効果・メリットがあると感じている（お感じになる理由も以下にご記入ください）

- ・年度で途切れることなく研究を実施できたことにより、研究計画を予定より早く進めることができた。また、これまで難しかった高額な機器を購入することも可能となるため、従来よりも、研究を進めやすくなり、成果創出につながると期待できる。
- ・これまで年度末は研究費を使いづらく、学会発表や資料調査など海外出張の時期に制限があったり、研究費をどのように使い切るかを考える必要があったが、次年度に繰り越すことによって研究を長期的に行えるため、むしろ計画的に研究を進めることができた。
- ・柔軟な研究費使用が可能になったことにより、必要な時期に優れたポストドクの雇用ができたため、2割程度研究パフォーマンスの向上に寄与した。
- ・教育研究機関である大学では、学生の協力により、研究が進展する割合が高い。ポウドクなどと違って、学生は能力差が非常に大きい。能力の高い学生が多い時に多くの研究費を使うことができるようになった。
- ・年度末に物品の購入が可能になったので、その期間に試薬等が不足して研究が途切れる心配をしなくてよくなった。次年度に計画していた研究を、前年の年度末に先立って開始することも可能となった。年度末の学会や論文の英文校正等にも効率的に使用することができた。
- ・これまで1月から3月は、出張など経費に関する支出の管理などで、事務担当者への書類対応を求められ、実質のデータ収集はできなかった。1月から3月間が、基金化によりデータ収集が行えた実績から2割といっても過言ではない、研究プロセス進捗のメリットを感じる。
- ・良い意味で研究計画時には思いもよらない発見があるのが優れた研究であり、それに対応するのは複数年度にわたる修正が必要で、それが可能になる効果が大きいため。

ウ 単年度執行の研究費による研究と比較し、おおよそ3割程度、研究成果創出上の効果・メリットがあると感じている（お感じになる理由も以下にご記入ください）

- ・自分の研究分野（疫学）に関しては非常にメリットが大きいと感じている。自治体などと協力しながら集める健診データをもとにした研究を行っているため、自治体の都合に合わせてこちらも研究費を使用していく必要がある。基金化により、予算

- の執行時期をずらすことが可能となったため、必要なデータ収集を必要な時期に行いやすくなる（前倒し、翌年に先送り）ことは非常に研究を進める上で有益である。
- 単年度執行の場合は、年度末の2月から3月までと翌年度の4月から5月までは事実上研究費の執行が不自由または不可能となる。これが解消されるだけで、1.5倍（12ヶ月÷8ヶ月）の効果がある。
 - 大学に勤務する研究者にとって、2月～3月は研究に専念できる大事な時期でもある。その期間に研究が遂行することが困難であり、研究パフォーマンスがきわめて低調であった。昨年度は早速、2月～3月に大規模な調査を実施でき、非常に大きな効果を上げることができた。
 - 採択後、計画していた受託解析よりも新しく精度の高い受託解析が利用できるようになった。また、これを利用すれば後年度の受託解析が不要になることがわかった。ただし、計画していた最初の受託よりも高額であったので、24年度の受託解析分を23年度に前倒しをして、23年度に新しい高精度の受託解析を実行することができた。今回の研究は遺伝子解析に関連したものであり、この分野の技術的進展は非常に早い。このことから、基金化は研究成果創出上の効果があったと考える。
 - 年度末の2月～3月の2ヶ月間はフィールド調査が実施できず、研究パフォーマンスが極めて低かったが、基金ではそのような問題が発生しなくなった。また、年度で途切れることなく研究を実施できたことにより、研究計画を予定より早く進めることができた。
 - 1年単位で結論が出せる研究は少ないので、なるべく大きな枠（年月）で、なるべく大きな研究費をもらえる方が研究の発想、進展に大きな自由度が生じる。これは1割、2割と数字化できるメリットでは無く、その効果は計り知れないほど大きい。
 - 研究が進行した場合に、比較的高額な装置を前倒しで導入できる点。また、研究成果が出た場合の海外発表などの旅費が増加しても追加できる点。

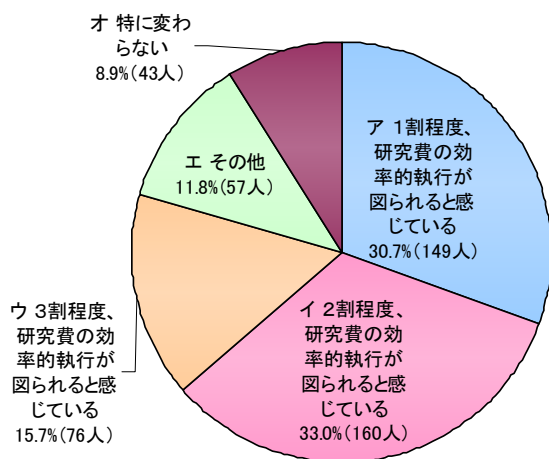
② 基金化による研究費の節約など研究費の効率的執行が図られていると感じるか。

(回答のまとめ)

基金化によってどの程度研究費の効率的執行が図られていると感じているかについては、「1割程度ある」、「2割程度ある」及び「3割程度ある」を合わせると79.4%となっている。

(解説)

程度の差はあるが、基金化によって研究費の効率的執行が図られていると感じている研究者は約8割おり、昨年度実施した「最先端研究開発支援プログラムにおける基金の活用に関する調査」においても、同様の質問に回答したすべての研究者が基金化によって研究費の効率的執行が図られていると感じていることから、研究費の基金化は額の多寡に関わらず、研究費を効率的に執行する上で大いに効果があると考えられる。



○自由記述（主な意見）

ア 単年度執行の研究費による研究と比較し、1割程度、研究費の効率的執行が図られると感じている（お感じになる理由も以下にご記入ください）

- ・研究計画の変更が柔軟にできるようになったため、真に必要なものを、真に必要な時期に購入できるようになるなど、研究費の効率的な執行ができるようになった。
- ・2月3月の年度末には研究会等が多く開催される。急に参加しなければならないために通常20万程度余裕を持っておくのだが、出張がなくなっても無駄になることがなくなった。これにより数万から十数万の「使い切り」をする必要がなくなり、効率的であると思う。
- ・年度末に使い切らなければならないという義務感は、時として無駄な使い方をしがちになる。まずそれがなくなるという点は節約に繋がる。
- ・社会科学系の小規模の研究では、大きな変更はまずないことから、若干の効果は期待できるといえる。ただ、基盤（A）、基盤（B）で実施となれば、2割程度の効果は期待できる。

- ・たとえば発注後納品まで長期間を有する抗体試薬等、実験の進み具合に応じて発注することが可能となる。これは成果創出の効果と関係する。

イ 単年度執行の研究費による研究と比較し、2割程度、研究費の効率的執行が図られると感じている（お感じになる理由も以下にご記入ください）

- ・当初予定より価格の変動のあった備品の購入などに際し、より性能の良いものを適切な時期を選んで購入することができるようになった。研究計画の柔軟な変更により、同じ費用でより質の高いデータの取得が可能になり、研究の推進に役立った。
- ・年度をまたぐ海外出張の航空券をいち早く、安いレートで入手できるようになり、研究費を無駄なく効率よく使えるようになった。
- ・複数年度にわたる保守契約の締結にあたり、一括の前払いが可能になったことにより従来と比べ2割程度安く契約することができた。
- ・年度をまたぐ予算執行が可能なることから、年度末の少額の残金を次の年の機器購入に充てることができ、研究費の使い勝手が向上したように感じる。また、今回は行っていないが、年度末の学会参加なども研究費で行うことができるため、活発な学会、研究会への参加が期待できると感じている。
- ・情報交換のための海外出張、欧文論文校閲への謝金などは、年度がずれることができるので、そのための支出を前倒し、あるいは繰り越すことができるようになった。
- ・旅費など可能な時期に格安チケットなどを購入したり、施設設備費等も複数年による使用契約などが可能となり経費削減が図られると感じている。

ウ 単年度執行の研究費による研究と比較し、3割程度、研究費の効率的執行が図られると感じている（お感じになる理由も以下にご記入ください）

- ・科研費の使い勝手の良さは、これまでと比較にならないほど向上した。研究の成果を出すことに専念でき、予算の使い切りなどに煩わされなくなった。
- ・単年度の使いきりでは無駄が出るが、日々変わりゆく研究動向の大きな流れに即して、無駄のない研究費の執行により、研究テーマがそれない程度に自分の研究の方向も少し変えることができるようになる。
わずかに円安に向かったため、購入予定の装置の値段が上がってしまったが、前倒し等の執行により、装置を購入できる。また、装置の一括購入により、割引がきくようになる。
- ・以前は年度末に3ヶ月程度の空白期間があったので、その間に必要な試薬類をあらかじめ手配する必要があったり、1円単位まで使い切るのに大変な手間がかかった。また、機器・試薬の購入もキャンペーン期間などを有効に利用することができるようになり、安く物品の購入ができるようになった。
- ・公的資金の単年度主義が諸悪の根元であったのは間違いないので、その枠が外れたことの意義は大きく、そのメリットは年度を経るにしたがい強く実感できるものとする。当面は、「3割」を越えるメリットがあるとする。仮に当初は事務方の負担が増加したとしても、研究計画自体の円滑で柔軟な進行や研究費節約のメリットの方がはるかに大きいであろうことを指摘しておきたい。

エ その他（具体的な内容を以下にご記入ください）

- ・特に今年度は昨年の震災の影響も有り、必要とする機器の搬入ができず、大幅に実験が遅れた。その為、基金になったことから、購入できなかった機器費を無駄に使用しなくなって良くなった。
- ・基金化という考え方にまだ使う側が慣れていないので、このシステムを効率的に使用することができていない。
- ・効率的執行が図られているとは思いますが、その程度がどの程度なのかはわからない。

オ 特に変わらない（その理由を以下にご記入ください）

- ・基金化の新システムに慣れていないので、戸惑ってしまう部分も多かったため、全体の効率化という意味では、初年度に関してはそれほど変わらないと感じられる。基金化の制度に関しては、研究費の予算額によってもそのメリットに大きく違いが出るのではないかと考えられる。数百万程度の予算であれば、前倒しをして大型機器の購入に充てるといったことは殆どできないので、消耗品の数で調節するという作業の回数が減るといったくらいのメリットでしかなかった気がする。
- ・2年の研究費だから感じられるほどの効果はないが、もっと長期間の研究費だったらきっと効果があると思う。
- ・必要な時期に必要なものを買えるようになったメリットはあるが、常に節約をしている自分としては特段の節約効率が上がるとは考えていない。ただ、いつも多額な研究費をもっている研究者にとっては、何らかの節約効率向上があるのかもしれない。
- ・基金化のメリットは十分理解できており必要なものと認識しているが、研究費の効率的執行に優位な差が出るのはより大型規模の予算の場合ではないかと考える。現状では、メリットは感じるが、運用においてそれほど大きな差が出ているようには感じない。
- ・これまでの研究費の節約には努めてきたので特に変わりはない。事務負担も同様である。